

詩とことば

＊ 2月

阿部 公彦

詩には昔から強力なライバルがいた。絵画である。西洋では古来、絵のように対象を描出するのが詩の理想とされ、古代ローマ

の詩人、ホラティウスや「ウト・ピクトラ・ポエシス」(詩は絵画のように)という一節がよく引用されてきた。対して東洋はどうか。二つのジャンルは同じく近いものとされたが、絵巻物や現代の漫画を見てもわかるように、絵に直接ことは添える方法も発達。対立・拮抗するより、混じり合い融和する伝統が見られる。両ジャンルをともにこなす人も多かった。

全国巡回中の「画家の詩、詩人の絵」はこうした伝統を踏まえつつ、近代日本で二つのジャンルがどのように交わったかに焦点をあてる興味深い企画だ(3月27日まで姫路市立美術館。図録は青幻舎)。全体は「画家の詩」と「詩人の絵」の2部で構成される。川上澄生や棟方志功の版面に織り込まれた「詩」はよく知られるが、青木繁の絵画

絵画との取り合わせの妙

と短歌を合わせて見る機会は多くはない。無意識が強烈に横溢する古賀春江や難波田史男、草間彌生といった作家の画面が、いったいどんなことばでほぐされるのか。宮沢賢治や立原道造、まど・みちおといったお馴染みの詩人がどんな絵画世界を展開したのか。いずれも取り合わせの妙を楽しめる。

『高柳誠詩集成』(書肆山田)の刊行が始まった。第1巻は「アリスランド」「卯宇宙/水晶宮/博物誌」「都市の肖像」など初期詩集を収録。観念とのねっとりした戯れや、妄想的な観察をふくらませる世界は、ときに妙な笑いを生みつつ、コラーシュや博物誌的羅列の幻惑感で酔わせる。他者の追隨を許さない境地だ。稲川方人『形式は反動の階級に属している』(書肆子午線)は以前の未刊作品も集めた回顧色の強い詩集だが、ことばは疾走感に満ち、一つ一つの言い回しもきびきびとシャープで激ままない。同じくスピード感を持った後藤大祐『誰もいない闘技場にベルが鳴る』(土曜美術社出版販売)の、若々しくほとんど蹶的な荒削りさと世代を超えて通ずると見えるのがおもしろい。後者は今後に期待だ。(東大准教授)

50・60代の方も多数活躍中! 長期安定雇用! 高い社員満足度&定率! 業界トップクラスの待遇!

ト拾書ナレ